



文集·写真

卒業生の思い出

八十年代

思い出は鮮明に

昭和四年度卒 柴北上

幸野 キ又エ (旧姓 二宮)

私は、大正十三年（一九二四）四月長谷小学校に入学した二宮（旧姓）キ又エ《黒松西の岩屋出身》です。

当時、私と一緒に入学した新入生は五十名くらいだったと思いますが、卒業して長い年月が経ち、思い出を語り合う同級生も少なくなっていました。

来年三月に長谷小学校が閉校になるということをお聞きしました。兄弟姉妹、娘や孫も通った歴史ある小学校がなくなることは、とても残念で寂しくてなりません。

卒業して約八十年経ちますが、楽しかったことや苦勞したことが今でも鮮明に懐かしく思い出されます。中でも一番印象に残っていることは校舎の新築です。

黒松の松巖寺の裏の河原に藁葺きの仮校舎が建てられ、全校生徒で二人用の机や椅子を運んだこと、二学期になって学校に行くと、河原敷き故に教室に草が生えていてビックリしたことなど、今では考えられない出来事です。

新しい校舎は、木造総二階建てで、今の体育館・幼稚園がある場所に建てられました。この校舎を覚えている方も多いことと思います。運動場は

当時の広さと変わらないでしょうが、子ども心にとっても広く感じられましたし、当時自慢の学校でした。それも老朽化によりずいぶん前に取り壊しとなって、木造校舎の思い出も遠い昔になってしまいました。

その頃のものはほとんど残っていませんが、幼稚園の裏の岩壁や校舎の周りの桜の木などを見ると、特に桜は木造校舎の落成記念に植樹されたもので、花の咲く頃、そのことが思い出されます。

修学旅行にも行きました。行き先は大分市・別府市で、ラクテンチや別府の大仏様を見学したことなど、ワクワクした気分を今でも思い出こし、懐かしい思い出がよみがえります。

昔は、時の記念日に、朝六時頃から登校して男子は藁^わ縷^ないを、女子は雑巾作りをするなど、決まりごとみたいなものもありました。また、今と違って兄弟姉妹の多い家庭ばかりでしたから、子守も子どもの重要な仕事で、隣近所助け合いながら学校に通ったものです。

今では想像もつかないことですが、私の通学途中の川には橋が架かっておらず毎日飛び石を渡って学校まで通ったものです。真冬の川は冷たくて足が切れるような痛さとアカギレに悩まされ、大水の時は遠回りをしたり、親戚の家に泊まつたりと大変苦勞しましたが、それでも学校に通うことが楽しく、家庭の事情で学校に通えない人もいましたので、親には大変感謝をしております。

兄弟姉妹が揃うと、そんな思い出話におしゃべりが尽きることはありません。

私と多くの人々の思いが詰まった長谷小学校は、少子化という時の流れに逆らえず閉校となりますが、多くの思い出とともに私の心の中から消えることはありませんし、卒業生の心よりどころとしていつまでも記憶に残ることでしょう。

長谷小学校、長い間ありがとうございました。
そしてご苦労様でした。

蘇れ!! 長谷文化発祥の地

昭和六年度卒 長畑

武藤 弘(旧姓三浦)

大正十五年(一九二六)四月小学校へ入学。校舎は木造二階建、老朽化で大きな柱二本で支えてあった。

入学式は二教室の大板戸を外して行なわれ新入生五十人、全校四百人余りだった。

校長は原田安馬先生。一年の担任は兼田政子先生。男の先生は洋服、女の先生は着物に袴。子供は着物。洋服も何人かいた。履物は草履か下駄で石ころ道を通学。草履が切れたり下駄の鼻緒が切れ裸足で歩いたこともあった。

教科は修身、国語、算術、唱歌、体操。石盤に石筆でハナ、ハト、マメ、マス等を書き、二重丸を貰って喜んで勉強した。

昭和二年四月松巖寺裏の川原のバラック建仮校舎へ移転。夏は魚捕り、水遊び、小鳥の囀り、小川のせせらぎを聞きながらの勉強も楽しかった。

昭和三年四月新校舎にかわり新しい気持ちで勉強しようと先生と約束した。

高学年は地理、歴史、理科、農業、女子は裁縫も加わった。

子供の健康や学習を励ます為の皆勤賞や品行方正、学業成績優等賞等も

あった。

教室は二人用机に男女別だったが、男女が並ばせられ女子を押し退けたりして問題を起した。私語や手遊び、居眠りをすると白墨が飛んできた、根ぶちでピシヤリ。時には、廊下に立たされたり、拳骨をもらって涙したこともあった。

祝祭日は、国歌を斉唱。教育勅語奉読。祭日の歌をうたい厳肅に行なわれた。式に陸軍将校の大礼服を着た渡辺進さんの勇姿に子どもたちはこころをひかれ、あんな兵隊さんになりたいと思った。また蜜柑もらいも楽しかった。

学校迄五キロ。帰りは腹を空かし柿や蜜柑、甘藷等を取ったりの悪戯ばかりし、学校へ告げられ度々叱られた。

農家は忙しいため、子供を背負ってくる人もいた。

補習を受けるため、友達と二人で朝早く出る。冬は提灯を灯して寂しい墓下の小道を急いだ。遠足は低学年は八石、高学年は三ノ岳。佐賀関の煙突やかすむ海を眺め心も広くなり大声をあげて走り廻る。昼食の時、握り飯がころころと転がり落ちたこともあった。帰りは部落別になり兵隊ごっこ等しながら帰る。運動会は家族総出で近所の人達と応援。特に徒競走や部落リレーに熱が入った。

稲の害虫捕りが部落別に行なわれ、細竹と紙袋を持ち苗代を廻り泥まみれになる。

学校での小さな体験や家庭の仕事を通じて得たものに勤勉、努力、教養、節約。これは、二宮金次郎の教えで今も心の中に強く残っている。

歴史と伝統ある長谷小学校、長谷文化の発祥の地が永久に消えることのないよう、生れかわることを期待して筆をおきます。

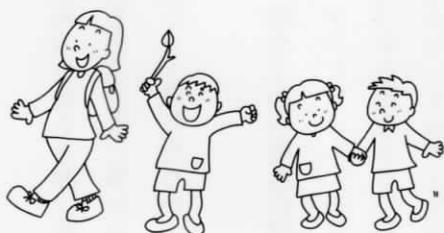
私を育ててくれた学舎

昭和十四年度卒 栗ヶ畑

阿南芳美

私は昭和九（一九三四）年四月に、大野郡長谷村尋常高等小学校に小学一年生として入学しました。今から七十五年前の事です。今はコンクリート建の二階の校舎ですが、当時は木造の総二階瓦屋根の大きな長い建物に驚きとたのもしさを感じました。正面玄関の右側が校長室で左側が職員室であつたように覚えています。そして正面の右側にベルの大きな鐘があつて授業の始まりと終りの時に小使のおじさんが紐を引っ張つて鐘をならしていました。教室で休み時間に鐘が鳴ると急に静かになり、先生の来るスリッパの音がすると「来た来た」と誰かが云い出してしーんとなつたのを覚えています。二階建ての校舎の裏に岩からしたり落ちる水を貯めたコンクリートのタンクがあり、蛇口が二つか四つか覚えていませんがあつておいしい水を飲んでました。その前に長谷村の形をした池がありました。小魚が二、三匹入っていた様でした。校舎の裏には西と東に便所があり、その中間に作業所か倉庫のような建物がありました。さて、入学式がすんで一年生の教室では「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」から始まりました。担任は黒松の高柳文江先生でしたが、夏休み中に病気でなくなつて二学期から柴北の穴見利雄先生となりました。この先生はお話が上手で、勉強とは別に授業は何時もお話を聴かせてくれて面白かった。二年生になると長野ヒサエ先生で、別嬪^{びん}さんでした。授業が終ると六年生のお姉さん達が掃除に来てくれました。三年生は二宮よしえ先生で、太つたやさしい先生でした。四年生になると私の一番こわい高野キミコ先生で、よく叱られて廊下に立たされたことは今でも忘れません。五年生は吉良重徳先生

でしたが、二学期からは穴見勤先生に替わりました。師範学校卒業ホヤホヤの若い気合の入った陸軍伍長の軍服姿で私達の担任になり六年生まで持上がりでした。六年生になると小学校六年から中等学校に行く生徒に補習授業があり五、六人が補習を受けました。私も大分工業を志望し補習を受けました。いつも試験で答案用紙を提出して採点され、内容の解説がありました。遊びたい年頃なのにつらい厳しい毎日でした。盆も正月も祭りもない約半年位だつたと思います。三月に受験の前日父と二人で大分市の親せきに泊り込み二日間の受験でした。全然面識のない県下の子ども達と机にいた途端に、何くそ負けるものかと闘志をかき立て深呼吸したのを覚えています。試験から帰つて二日目、大分市の親せきから「バスシタ」の電報が着いた時は本当に嬉しく、夢をみているようでした。七十五年前のこと幼稚園・保育園に行かないで、西も東もわからない幼児から六年間で県立の中等学校の試験に合格出来るまで教育してくれた小学校又各年の担任の先生に感謝しなければと感慨無量です。まして閉校と聞けば淋しさと悲しさ、空しさ等々交々の感情が去来しますが、この事が将来の子どものために、又長谷地区の将来に幸せをもたらすならばと念じ乍ら感謝の意を込めて思い出とします。



七十年代

思い出を川柳に托して

昭和十八年度卒 柴北下

渋谷 節子

長谷小学校が夏休み中のある日、私は校庭を訪れました。夏の陽に弱り果てた草が、伸びておりました。

先ず、開校百周年記念碑を拝し、黒木文雄先生の力強い書を、しみじみ味わせて頂きました。二十二年前の全村挙げての式典、祝賀会行事が昨日のことのように蘇り、懐かしさでいっぱいになりました。あの時、学校が閉校になるなどゆめにも思いませんでした。まだまだ栄えてくれるものと信じておりましたのに、悲しいですね。淋しいですね。

それから二宮金次郎さんに声をかけました。熱心に勉強していた本は落ちてありませんでしたが、薪はしっかりと背負うておりました。尊徳先生と讃えられ、私共に生き様を示してくださいました。勤勉努力の人、あんな人にならねばと思ひ、卒業いたしました。世は変わっても変わらない人間の姿です。

開校百年ゆめまぼろしの露と消え

碑と語るあれは浦島太郎だな

思い出を詰めた記念誌だきしめる

廃校となるか夏草風住し

学校が消える哀しい金次郎

金次郎背負うた薪降ろせない

学校が消える辛いね赤トンボ

二十年の歲月容赦なく過ぎる

いつの日か帰ってほしい子等の声

追いつけ追いこせ気がつけば過疎の中

統合して消え去ろうとしている学校の今を川柳に託して書かせていただきました。

長谷小学校よ、育ててくれてありがとう。

咲き誇る桜

昭和二十年度卒 大阪市(長畑出身)

安藤 正義

長谷尋常小学校、六十八年前兵隊さんを夢見て入学致しました。一学級六十四名の大世界で、先生も持て余した事でしょう。学生服から運動靴、文房具までが配給の時代で、数少ない数量で、全員に渡る迄に二年位を要したものです。それでも不平は云えませんが!! 欲しがりません勝つまでは!! が教訓でした。そんな時代でも、水の元、三ノ岳への遠足は格別でした。梅干し、味噌漬に缶入りのふりかけを持って、八石で一息入れ、三年生までは解散、高学年は三ノ岳を目指す、と云うパターンで楽しい一日でした。しかし四年生頃から、大本営発表のニュースは刻々と変わる戦況。日に毎に戦火は北上し、やがて本土でも。灯火管制が敷かれ、タンスの取手から、アルミの弁当箱まで供出。子供心でも心配でした。村中総出の運動会。楽しい反面、婦人会までが竹槍を持つての訓練の公開。機関銃に竹

槍、当時としては自然の状況でした。出征兵士宅への勤勞奉仕、田の草取り、芋の草取りと、労働奉仕です。六十年前の想い出は、考える程に前後して、現在の小六では想いも付かない状況下でした。生まれ育った集落も、今では姿はなく、政治の力では回復は出来ない状態迄になっていることでしょうか。今や村中が集まって楽しめる何かを考える事も大事ではないでしょうか。そこから生まれる何かヒントがあると思います。田舎、地方、だけではありません。古い商店街は閑散となり、閉店や閉鎖が相次いでいます。人口の移動等、常に世界は動いております。かつての校庭の桜のように、今一度咲いて見たいと思います。

母校への想い

昭和二十三年度卒 黒松

安藤好幸

私達は六十七名での卒業です。昭和十八年の入学で、南方の戦線も急を告げ、軍は退却や敗走を「転進」と云う表現で取り繕い、総ての物資が統制下に置かれ、ランドセルも儘ならず「らしき物」での入学です。戦争だけは忘れられません。赤紙一枚だけでの召集は、Hさんの父も例外ではなく、地域挙げての見送りは日の丸の小旗を振りながら盛大なものでした。暫くして、白木の箱での帰還です。箱は幼い長男のHさんの胸に抱かれ、

母や姉弟、祖父母の葬列は全校総出の涙での出迎えでした。戦争の悲惨さ、残酷さを知り、あの光景は今も忘れることは出来ません。食料は欠乏し、米は年貢米のように供出させられ、これを補うため、芋や、麦、粟、

野草等で凌いだものです。またB29と零戦との真昼の空中戦は、スクリーンを見ている感じで思い出されます。そして八月十五日終戦です。やがて藁半紙の粗末な教科書は至るところ墨で塗り潰され、軍国教育から、民主教育への転換の瞬間です。戸惑う女の先生の姿が印象的でした。五、六年になると、ズック靴や、詰襟、セーラー服が目立つようになったのです。修学旅行は、農協の木炭トラックの荷台です。埃を払いながら佐賀関製錬所から、別府までの米三合持参の一泊旅行でした。トラックでの地獄巡りなど今日では想像も出来ません。全校三百八十人程でした。先生には恵まれ、戸伏康能、佐藤周友両先生は印象に残っています。短気で手の早い戸伏先生でしたが、優しい一面も見せてくれました。次の中学校でも先生方には恵まれ、生涯稀と思えるような厳しい体験もしましたが、私の人生に大きな影響を与えてくれました。長谷に生まれ、この地で教育を受けたことは生涯の誇りです。やがて火宅を後に、無漏路ムロジを彷徨ウツロウくことになりました。学校の灯は消えても、長谷の灯は燃え続けることを期待します。

六十代

母校長谷小学校閉校によせて

昭和三十一年度卒 黒松

樋口 工

この度長谷小学校が閉校されることを聞き、驚きと悲しみで心が痛みます。永き歴史に幕を引くことになり、これも過疎化少子化という時代の流れかもしれません。

私は昭和十九年生まれです。五十数年前の事で記憶が曖昧なところがありますが、憶えていることは二宮金次郎の銅像裏にコンクリートの水道池などがあつたと思います。三ノ岳の家から片道四キロ程の道を毎日通っておりまして次第に鍛えられて足は早くなり、そのおかげで逃げ足が一番でした。ちなみに勉強は後ろから一番です。学校が終ると前の川で泳いで遊び疲れて帰るころは空腹で、よその家に植えてある物を失敬して食べたりしました。西瓜、柿、栗、芋など。栗などは渋皮を取るのに雨戸でこすつてとります。桑の実で口の中、舌など紫色になっていた。次の日学校に行くと先生にゲンコツを食らう。ゲンコツはまだよい方で竹の根の節の多いネブチで、叩かれる頻度が高いので先生は同じところを叩き、コブの上にコブが出来たりして。ワルサのしすぎでした。遠足は三ノ岳の水の元に行っていました。勉強の出来ない私が唯一活躍できるのが運動会。この運動会は年に一度の御馳走の日です。ゴザを敷きその上でお昼を食べるので。どこの家庭も、いなりずし、巻きずし、卵焼など当時の私達には御馳走です。あの時の味は一流のお店でも味わう事が出来ませぬ。かけっこなど今とは違い競わせることをさせており景品など、今思いかえせばかけがえない楽しかった日々です。

幼少の時のみの思い出ですが、私は三ノ岳で生まれ育つたことを誇りに思います。百二十二年もの間長谷小学校を支え続けて下さった方々に感謝しお礼を申し上げます。有難うございました。

思い出

昭和三十四年度卒 黒松
安藤 勝子

長谷小最後の運動会は、多くの人々の感動のうちに幕を閉じました。そのとき私の脳裏にはまるで古いセピア色の映画を見ているかの様に運動会の思い出が映し出されました。昭和二十八年の十月、入学一年前の運動会。恒例の「来年の一年生」のプログラム、旗とりのかけっこ……。前日の雨で痛んだ校庭に転び真新しい洋服を汚し悲しくて泣いてしまったこと。当時は山の上にあつた中学と合同で運動会を開催していました。観客は、校庭、窓を取りはずした校舎、道路を隔てた商店の二階までずなり状態でした。私の学年は三クラスもある第一次ベビーブームの新生一年生でした。競技は数多く、終る頃には肌寒く、中学のお兄さんや先生方が片づけのゴミに火を入れ、キャンプファイヤーのごとく暖をとらせてくれたものでした。

ばあちゃん子で臆病だった私に、自転車に乗れる様にしてくれたのも校庭と当直の先生。この齢になつてもスポーツ好きにしてくれたのも校庭と当直の先生。又他の男の子達は勉強をもみてもらつたりし、夜になるまで楽しくはしゃぐ声が校舎や校庭にこだましたものでした。私は今でも学校の近くにいられた事に感謝し、幸福に感じています。

高学年になつて、夏の学校林の下刈でハチにさされたり、下の川で水泳の授業を受けたりと、近年の児童さん達とは違う自然を本当に自然に心身に染み込んでいかせる事が出来たように感じます。又五年生の時は今年と同じ様に日食があり、ススをつけたすりガラスで観察したものでした。

五十年代

古い木造校舎は私の心の中に想い出いっぱい。コンクリートの校舎は私と子供達の想い出。PTA時代、長谷校区後援会の立ち上げに昼夜を問わず飛びまわった事。体育館は主人が百周年記念行事に没頭していた想い出。

いつもそばにあつて家族の様な学校は、私に今、吉田兼好の徒然草の一節を深く刻むのでした。

白雲浮かぶ三ノ岳

緑に燃ゆる山のなみ・・・

昭和四十年年度卒 柴北下
後 藤 美和子(旧姓 武藤)

半世紀前に覚えた校歌は、今も脳裏に鮮明に焼きついております。桜満開の入学式。東側の石段を舞台に、有田キミ先生の優しい目差に抱かれ記念写真。校庭での宝踏み、ゴム飛び、桜の枝に届けとばかり漕いだシーソー、桜の木を背に男子と女子一緒になって馬とび。夏は前の柴北川での水遊び。秋の遠足は、わが家の定番、寿しごはんのおにぎり弁当を持って、三ノ岳登山。柴北お飯屋での宝探し。運動会のメインイベント部落リレーでは、六年間選手で走り、毎年優勝旗を先頭に、校庭を一周。柴北下は、本当に強かったのです。淋しいことに、学校は閉校となりますが、長谷小学校のシンボルである校庭の桜は、私たちの、たくさんの思い出を、やさしく幹に抱き、そして春になると満開に咲きほこり、卒業生を楽しませ

せ、見守り続けてくれることでしょう。

縁あつて、人生の後半も生まれ育った地で過す幸運に恵まれました。夫も同じ長谷小学校の卒業生です。共にそれぞれたくさんの思い出があり、母校の思い出を語る幸せ。夫婦で、引き出しいっぱい詰まった思い出を語り合い、楽しく、健康で、笑いのある老後を・・・元気なうちに、また三ノ岳に登って

「ヤッホー！」と。

温かく育んでくれた長谷小学校

昭和四十一年年度卒
高 木 高 子(旧姓 穴見)

思い出を書くにあたり、同級生や先生方、私に関わってくださった方々が思い出されます。皆さんお元気ですか。

私の通っていた校舎は木造でしたが、今はもうありません。通っていた校舎がなくなる時は淋しかったのですが、長谷小学校という名称は引き継がれていました。今回は、名実共に長谷小学校がなくなってしまうので、とても残念です。

小学校時代に思いを馳せるには、時が経ちすぎていて、おぼろげにしか思い出すことができません。

私が登校するのは、いつも東側の石段からでした。この石段は傾斜があり段数が多く、低学年の頃には大きな壁のようでした。一段一段気をつけて上り、帰りにも気をつけて下りていたのですが、雨の日には下から三

段目あたりで足を滑らせて落ちたことがあります。

ここでは、入学の記念写真を撮ったことを覚えています。

石段を上りついて校庭に立つと、広い運動場と大きな校舎があり、低学年のクラスは西側の方だったので、遠くに感じていました。

私たちの時代には、今のプールのある辺りにシーソーなどの遊具があり、よくこのシーソーで遊んだものです。道路がある南側には桜の木が奥まで並び、四月の頃にはきれいな花を咲かせていました。桜の木の内側には鉄棒があつて、鉄棒が得意だった私はここでもよく遊んでいました。

今、校舎跡に立つと、それほど大きくはないこの運動場で、体育や秋には運動会があり、休憩時間にはボール遊び・縄跳び・陣取り遊び・ゴム跳びなどをして、いたるところで遊んでいました。昔の子ども達は活発で遊ぶのが上手だったんだなあと思っています。

当時は、遠足やスケッチで地域に出かけることが多かったように思います。出て行ける場所が多かったのです。

夏にはプールがなかったので、田んぼの側の泥濘ぬかるんだ道や石ころの上を歩いて下の川まで行き、水遊びを楽しんでいました。

私たち一人ひとりに、たくさんのお出を残してくれた長谷小学校、本当にありがとうございます。長谷小学校を誇りに思っています。



四十代

長谷小学校の思い出

昭和四十八年度卒 葛川

高木 向陽

長谷小学校の思い出・・・考えると続々と懐かしい光景が浮かびます。

私が入学した頃の長谷小学校は、今とは随分違っていました。まず、児童数は一学年二十人から三十人くらいで、校舎やそれに付随する施設も今あるものとは違い、学校の周りや通学路もかなり変わりました。校舎は二階までで、体育館はなく、木造の講堂があつて、それが体育館のかわりでもありました。幼稚園ができたのは、私が小学校二年生の頃、昭和三十八年生まれの妹が第一期生でした。プールもなく、体育の水泳は、すぐ下の柴北川で泳いでいました。現在先生方が駐車場として使っている場所には交番があり、駐在さんの家族が住んでいました。子どももいました。その後、交番はなくなり、その家は図書館になり、昼休みによく入り浸つたものでした。また学校の前には白石商店という雑貨屋があり、文房具などを売っていました。

通学路は、今とは比べものになりません。舗装は全くなく、砂利道でした。でこぼこ道にはよく雨水がたまり、バスが通るとよく泥水を掛けられたものでした。頭にきて、バスに石を投げつけ、後で先生にしっかり叱られたことも覚えています。「ナンバー5505」今でも忘れません。

周りの家々、田んぼの様子、道の幅とくねくね具合、高度成長の中、どんどん変わっていききました。

学校の行事も今とはかなり違っていました。努力遠足は三ノ岳（水の元または八石）でした。登山道も今とは全く違う道でした。

運動会では入場行進をして始まり、競技には部落リレーもありました。今の長谷文化祭にあたるものは学芸会といっていました。また年に一度、映画鑑賞会や紙芝居や狂言などもありました。

思い出は尽きません。私はこの長谷小学校ですごした六年間を一生忘れることはないでしょう。大切な歴史のページとして子ども達に伝えることができたらと心から思います。

私の原点

昭和五十六年度卒 黒松

白石 祐三子

私が長谷小学校に入学したのはもう三十年以上も前です。二年間受け持っていた梅木フミ子先生は、きれいで優しい先生でした。学校に行くのが楽しくて、家の前の細かった下り道を、毎日パタパタと張り切って駆け下りたものです。

三年の頃の担任の三浦マチ子先生は、習字や作文などの指導にも熱心で、いい作品ができるまで何度も教えてくれました。凛として厳しく、そしてとても温かい先生でした。

四年生の担任の甲斐能成先生は、いつも私たちと遊んでくれました。若くて背が高く足の速い先生は、私たちのあこがれでした。

六年生での修学旅行は犬飼小学校と合同で行ったのですが、当時は長谷小も同級生が十八人いましたので心細くはありませんでした。担任の宮崎明治先生は穏やかな先生でしたが、卒業の年ということもあり、勉強の面

では鍛えていただきました。

大好きな場所は図書館でした。夏は窓から入ってくる風とそばを流れる小川の瀬音がとても涼しく気持ちよかったです。

冬は、校庭の隅にできる霜柱を踏むのが楽しみでした。東側の石段にある小さな穴に入ると中が温かかったのを覚えています。

登下校中も楽しいことがたくさんあり、友だちとよく遊びました。途中で地域の人に挨拶をすると必ず返事を返してくれました。

友だちや先生、そして学校そのものが大好きで楽しい思い出がいっぱいの長谷小学校。この校舎から子どもたちの姿が消えてしまうと思うと切なくてたまりません。教育実習で初めて「先生」と呼ばれたのもここです。いろんな意味で教師としてのわたしの原点は長谷小にあると思っています。いつかはここで教壇に……という思いはもう叶いません。寂しいですが、これから出会う子どもたちが小学校時代のことを思い出す時、温かな気持ちになれるような、たくさん思い出を一緒に作っていける教師でありたいと思っています。

こども神楽

黒松神楽楽員長 大塚 勝美

黒松神楽が長谷小学校児童に神楽を指導するようになったのは、犬飼町ふるさと振興祭で児童が上演すると決まっただから、十年以上前になります。学校での練習は運動会が終わってから本番まで、そして翌年はまた一からだから五方礼始を舞うのが精一杯でした。平成十八年に学校とし

での取り組みが終わった時に、父母代表に「引き続きやりたい子供には指導します」と伝えましたが申し出はありませんでした。

すっかり子供のことを忘れていた去年の春、現PTA会長の原山さんから、子供達に教えて欲しいとの依頼があり、子供神楽がスタートしました。メンバーは五年生の原山采佳さん、安部いつかさん（神楽を二年経験）、三年生の平石諒君と幼稚園児の森一生くんの四名です。しかし一生くんには無理だったので三名での練習でした。最初は神楽の基本である五方礼始から始めました。この神楽には五名が必要なので、大人が二名加わったの練習でした、このメンバーで黒松の秋祭り、長小の文化祭、犬飼町文化協会の発表会で舞いました。三名の子供達は一年間よく頑張ってくれました。いつかさんは安心して見ていられる。采佳さんは少しおっちょこちよいだけど真面目に取り組んでくれる。諒君は直ぐにふざけるけれどセンスは抜群。一生君はよく駆け回って遊んでた。ある舞台で登場順をいつもと変えたら諒君が舞えなくなり、悔しかったのか泣き出してしまい、私はオロオロするばかりでした。

今年になって三名には刀を教え、黒松の春祭りでも披露しました。一生君が練習できるようになり、原山耕大君が新加入したので子供達だけで五方礼始が舞えるようになりました。長谷小学校はなくなっても、子供達が希望する限り、伝承するためにも続けていきたいと思っています。